

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

オンラインによる研究会運営

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国学院大学日本語教育研究会 公開日: 2023-02-05 キーワード: オンライン開催, Google, slack, Zoom, SpatialChat 作成者: 伊藤, 孝行 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000870

オンラインによる研究会運営

伊藤孝行

1. はじめに

本稿は、2020年7月25日に初めてのオンラインにより開催された第28回国学院大学日本語教育研究会の運営にかかる記録である。国学院大学日本語教育研究会は2006年11月4日、国学院大学の創立記念日に第1回研究会が開催された。2007年以降は原則として毎年2回(7月・11月あるいは12月)開催され、院友(国学院大学卒業生・国学院大学大学院修了生の意)ほか日本語教育に関心のある人々の研究・交流の場として開催されてきた。2006年の第1回研究会から2019年の第27回研究会まで、発表数120、講演数25を数える(講演一覧を最後に掲げた)。2020年7月の第28回研究会は新型コロナウイルスの影響によりこれまでのように発表者・参加者が会場に集合して開催することが困難な状況になったことから、初めてのオンラインにより開催された。

2. 研究会開催までの流れ

国学院大学日本語教育研究会のオンラインによる開催にあたり、まずは研究会名義のGmailアカウントを取得した。これを機に、国学院大学日本語教育研究会からの一次連絡や研究会運営に関する受付等はすべてこのアカウントにより運営・管理することとした。今後、国学院大学日本語教育研究会の運営体制が円滑に継続できるようファイルには運営上必要となる時系列順にナンバリングした。

2.1. 発表応募受付(30日前)・発表応募受付〆切(24日前)

発表応募受付については、これまでどおり国学院大学日本語教育研究会メーリングリストで募った。本研究会の発表希望者は国学院大学大学院文学研究科高度国語・日本語教育コースに在籍している大学院生が主であるため、現在は指導教員へ直接発表応募の意向を伝える方法が主であるが、今後は発表応募受付についてもGoogleフォームを作成し、Googleフォーム経由での発表応募受付を検討したい。

2.2. プログラム確定(20日前)・プログラム周知(20日前)

発表者・発表題目・発表内容をもとに研究会のプログ

名前	タイプ	最終更新	ファイルサイズ
04_【発表要旨】 運営にかかわる各委員一覧	シート	17:03 昨日	-
04_【発表要旨】 アンケート	シート	2020/11/09 昨日	-
04_【発表要旨】 アンケート (国語)	シート	2020/11/09	-
04_【発表要旨】 発表にあたって 山	シート	2020/11/04 昨日	-
04_【発表要旨】 プログラム	シート	2020/07/27 昨日	-
04_【チラシ】 Googleドキュメント版,Googleフォームに...	シート	2020/07/27 昨日	-
04_【チラシ】 一太郎版	シート	2020/07/27 昨日	31 KB
04_【チラシ】 Word版	シート	2020/07/27 昨日	34 KB
04_【チラシ】 pdf版	シート	2020/07/27 昨日	34 KB
04_【発表要旨】発表要旨 発表会のご案内	シート	2020/07/27 昨日	-
04_【6-1】 調査表	シート	2020/07/27 昨日	-
04_【発表要旨】 アンケート	シート	2020/06/05 昨日	-
04_【発表要旨】 アンケート (国語)	シート	2020/06/05 昨日	-

参考 1 Google ドライブによる各種フォーム等の管理

第28回国学院大学日本語教育研究会
日時：2020年7月25日(土) 14:00 - 16:30 (日本時間、開場 13:50)
場所：Zoomミーティングを使用します
参加費：無料
定員：60名(先着順)
使用言語：日本語

発表1 (14:00-14:30) :
発表者：茅桂英 氏 (国学院大学大学院特別研究生)
題目：ビジネス場面における依頼表現について
— 企業で実際に用いられているメールを調査対象として—

発表2 (14:30-15:00) :
発表者：藤新珂 氏 (国学院大学大学院生)
題目：ビジネス日本語文における二重敬語について

発表3 (15:00-15:30) :
発表者：朱大江 氏 (国学院大学大学院生)
題目：ビジネス日本語における陳述前詞について
— 「ぜひ」「ぜひとも」を中心に—

発表4 (15:30-16:00) :
発表者：呉雨 氏 (国学院大学大学院生)
題目：中国人日本語学習者による依頼場面における副詞の出現傾向
— 依頼メールを調査資料に—

発表5 (16:00-16:30) :
発表者：舟本正太郎 氏 (国学院大学大学院生)
題目：留学生のためのITJラッシュ専門用語
— 高等学校「情報」科目の教科書を用いた分析—

【参加申込方法】
申込方法：以下のフォームにアクセスし、お申し込みください。当日申込、当日参加はできません。
<https://forms.gle/R6DWVxjsjAzHQLb7>
申込期間：7/6(月)09:00 - 7/18(土)17:00 (日本時間)
問合せ先：wakagi1103@gmail.com

参考 2 研究会チラシ

ラムを確定した。研究会開催の周知にあたっては国学院大学日本語教育研究会メーリングリストおよび国学院大学ホームページにプログラムをアップロードし、周知した。

2.3. 参加申込受付開始(20 日前)・参加申込受付〆切(6 日前)

参加申込については、今回から Google フォームで作成した参加申込フォームを利用し、期限を設けて参加申込を事前に受け付け、Zoom ミーティングへの事前登録をお願いした。第 28 回研究会は Zoom ミーティングを使用する都合上、定員の上限があるため事前に参加申込人数を把握する必要があったこと、またセキュリティ対策(いわゆる ZoomBombing 対策)のためである。参加申込受付〆切後、Google フォームへの事前登録情報と Zoom ミーティングへの事前登録情報とを照合し、情報が異なる場合には個別に参加申込者に確認をした。

参考 3 研究会参加申込フォーム

2.4. 研究会のお知らせ(5 日前)・懇親会のお知らせ(5 日前)

研究会のお知らせについては、参加申込の際のメールアドレス宛に送信した。項目は 4 つ、Zoom ミーティングにかかる情報、Zoom の設定について(名前表記、オーディオ設定、質問方法)、プログラム、そして発表者から事前に送付していただいた発表資料(pdf)である。

懇親会のお知らせについては、参加申込フォームに懇親会参加希望とされた方々へメールを送信した。懇親会は SpatialChat を使用した。参加申込受付フォームで懇親会への参加を希望する方へ SpatialChat の利用方法を送付した。なお、現在(2020 年 11 月)で利用規約が変更されたため、2020 年 7 月当時と異なるところがある。



参考 5 懇親会のお知らせ



参考 4 研究会のお知らせ



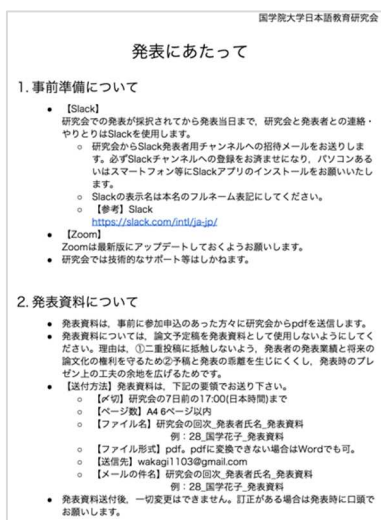
参考 6 懇親会のご案内
(SpatialChat への入り方)

2.5. 司会担当打ち合わせ (22 日前)

司会担当打ち合わせについては、司会担当 4 名の日程調整の上、Zoom ミーティングで実施した。研究会の流れについての確認に加え、slack および SpatialChat の動作確認を行った。

2.6. 発表者とのやりとり・発表者との打ち合わせ(当日)

運営と発表者とのやりとりについては、まず「発表にあたって」と題した発表前～懇親会までに必要な事項(slack, Zoom, 発表資料, 質疑への回答方法等)を配付した。その後発表者全員を slack チャンネルに招待した後は slack のみを使用した。研究会当日は発表中も含めて国学院大学日本語教育研究会との連絡手段として slack を使用するため、slack を初めて使う発表者に slack に慣れてもらう目的もあった。



参考 7 発表者への連絡 -
「発表にあたって」



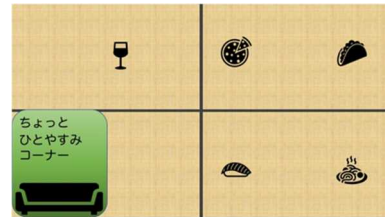
参考 8 slack (発表者への連絡用に作成したチャンネル)

2.7. 研究会

研究会については、2.3 に記したとおり Zoom ミーティングを使用した。司会担当は4名、1名のホストと3名の共同ホストにより司会を分担した。発表形式は口頭発表のみ。発表時間の内訳は発表20分、質疑10分。参加者からのチャットによる質問を受け付け、発表中・発表後にチャットへの書きこみを随時確認し、発表者に音声による回答をお願いした。録画は行わなかった。

2.8. 懇親会

懇親会については、2.4 に記したとおり SpatialChat を使用した。SpatialChat はそのスペースに自身のアイコンが表示され、そのスペースにいる誰かのアイコンに近づけると音声が増大になり、アイコンから離れると徐々に音声が小さくなる特徴があり、操作が直感的であり体感的にも実際の懇親会会場に近いことから SpatialChat を選択した。集合の目安に食べ物のアイコンを等間隔に配置した簡素な背景を用意した。また、背景の左下に会話をする必要のない休憩スペースを左下に用意し、適宜休憩できるようにした。



参考 9 SpatialChat 背景

2.9. アンケート送信(当日研究会後、一斉メール)・アンケート×切(7日間)

研究会後、Google フォームで作成した任意の無記名アンケートを実施した。質問数は全4問、内訳は3問の選択式質問(必須)・1問の自由記述(任意)である。アンケートへの回答は任意であったにもかかわらず、約70%の回答をいただいた。今回の初のオンラインによる開催となった研究会について全体的にいかがでしたか。という問いに対する5段階評価では平均4.4(最小3, 最高5)、「また本研究会に参加したいと思いますか。」という問いについては平均4.7(最小3, 最高5)という結果であった。

自由記述回答が多かったのは「発表者の発表スライドを画面共有してほしい」という要望がもっとも多く、次いで質問方法について、「チャットによる質問ではなく音声で質問したい」という回答であった。これらのアンケート結果は今後の研究会運営にとってありがたいものであり、今後の検討課題として参考にする。

参考 10 アンケート

3. おわりに

以上、2020年7月25日に初めてのオンラインにより開催された第28回国学院大学日本語教育研究会の運営にかかる記録を記した。今後もオンラインによる研究会の開催は臨時的な手段ではなく、通常の開催方法の一つとして認知され定着してゆくことは容易に推される。国学院大学日本語教育研究会から3か月後の10月には日本語学会が初めてのオンラインにより開催され、11月には日本語教育学会がオンラインにより開催され、2020年の学会や研究会はオンライン開催元年となった。オンラインによる開催となった経緯についてはさまざまあろうが、これを機にこれまでの運営体制を見直し、運営・発表者・参加者・参加検討者四者にとってより満足度の高い運営体制の構築を目指し、時代の変化に応じた運営に努めたい。

参考資料：国学院大学日本語教育研究会これまでの講演一覧

回	年月日	題目	所属(当時)	講演者(敬称略)
4	2008/7/19	日本語教育を考えるー日本語学校で教えるー	前杏林大学教授	河原崎幹夫
5	2008/11/8	日本人の顔をして日本語が話せないのは恥ずかしいか	サンパウロ州立カンピーナス大学大学院助教授・国学院大学大学院短期招聘研究員	エウザ タエコ ドイ
6	2009/7/18	アメリカにおける日本語教育の過去・現在・未来	アリゾナ州立大学名誉教授	エツコ オバタ ライマン
7	2009/11/14	イタリア人に日本語を教えるための具体的なアプローチ	ヴェネツィア大学教授	アルド・トリニ
8	2010/7/17	体験から語る日本語教授法ー長沼から鈴木へー	学校法人長沼スクール顧問・明海大学名誉教授	豊田豊子
9	2010/11/20	ビジネス日本語の理論と実践	国際教育開発協会理事	高見澤孟
10	2011/7/30	日本語動詞活用の分類ー17～19世紀内外比較の観点からー	国学院大学教授	シュテファン カイザー
11	2011/11/19	英華字典と英和辞典との相互影響ー20世紀以降の	成城大学教授	陳力衛

		英和辞書による中国語への語彙浸透を中心にー		
12	2012/7/14	日本語学習者のための会話の文法	筑波大学非常勤研究員(元筑波大学教授)	小林典子
13	2012/11/17	携帯メールから作文へーろう児のリテラシー育成を考えるー	桜美林大学大学院教授	佐々木倫子
14	2013/7/20	多様な言語文化背景を持つ子どもたちの学びをつなぐーライフコースという視点からー	東京学芸大学教授	斎藤ひろみ
15	2013/12/7	観光接触場面におけるインターアクションと言語	東海大学教授	加藤好崇
16	2014/7/19	日本語表現文型と文法記述	東京学芸大学教授	北澤尚
17	2014/11/29	ニュージーランドにおける日本語教育	オークランド大学アジア研究学科上級講師	ウェイン ローレンス
18	2015/7/18	戦前・戦中の上海ピジンと日本語教育	上海交通大学	河崎みゆき
18	2015/7/18	日本語教育と市民リテラシー：これからの日本語教師が備えるべき資質とは	早稲田大学大学院日本語教育研究科教授	宮崎里司
19	2015/11/21	「ている」「ていた」「ていない」をめぐるいくつかの話	日本女子大学教授	江田すみれ
20	2016/7/16	言語教育の可能性	城西国際大学客員教授	岡崎眸
21	2016/11/19	S. R. Brown と語学学習材	国学院大学教授	シュテファン カイザー
22	2017/7/15	研究テーマの見つけ方-私の場合-	麗澤大学教授	井上優

23	2017/12/2	村上春樹をポルトガル語に訳すこと	東京工業大学非常勤講師・ポルトガル語翻訳者	スエナガ エウニセ
24	2018/7/21	ビジネス文書における複合助詞について	国学院大学教授	諸星美智直
25	2018/12/1	音声コミュニケーションのための日本語発音指導法を考えるーイントネーションに焦点を置いた発音指導法・学習法ー	国学院大学大学院兼任講師	中川千恵子
26	2019/7/27	日本語教育界の動向ー研究・教育・学習・行政・社会ー	学校法人長沼スクール常務理事・国立国語研究所名誉所員	柳澤好昭
27	2019/12/7	自然会話の教材化と共同構築型 WEB 教材 NCRB(Natural Conversation Resource Bank)	国立国語研究所	宇佐美まゆみ

註

国学院大学日本語教育研究会

<http://www2.kokugakuin.ac.jp/~moroho/page6.html>

国学院大学日本語教育研究会メールアドレス

wakagi1103@gmail.com

日本語学会 - 日本語学会 2020 年度秋季大会

<https://www.jpling.gr.jp/taikai/2020b/>

Zoom

<https://zoom.us/>

slack

<https://slack.com/intl/ja-jp/>

SpatialChat

<https://spatial.chat/>

—北海道大学大学院准教授—